

幽玄

題字 高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.43

平成24年3月30日

還暦を迎える『横浜能』

会長 藤本 圭佑

時空を超えると云えばTVD

ラマ「JIN仁」が印象に残った。医師南方仁が現代の最先端の医療技術をもって江戸末期にタイムスリップする物語である。実は私にもタイムスリップしてみたい時代がある。一つは一〇〇〇年の昔、「人々は腸をよじつて笑いこけた」とした「新猿楽記」(藤原明衡著)の世界。もう一つは六〇〇年前、結崎(観世)坂戸(金剛) 外山(宝生) 円満井(金春) など各座が競う中で、

ときの將軍足利義満を魅了した天才世阿弥の舞歌をこの目で直に見聞してみたい。

あれから幾百年、時代の荒波に磨かれた能楽は、横浜でも第二次大戦の戦禍から平和国家再建を文化の力で甦らせようとの先人たちの熱き思いが「横浜能楽謡曲連盟」を立ち上げた。愛好者による謡曲会を催す一方で、その核的事業として「横浜能」をスタートさせ、今年60回という節目を迎えた。

「横浜能」の60年のあゆみ

第1〜20回 復興から成長へ
(会長：中村桃山・新堀源兵衛・庄司清夫)

各流派家元クラスの能楽師による演能を横浜でとの想いで、昭和28年第1回「横浜能」が国際文化会館でスタートする。戦後間もない時代で演能に適した会場探しの苦労は察するに余りある。第2回神奈川会館、第3回以降29回まで県立音楽堂で開催される。

第21〜40回 一億総中流社会
(会長：庄司清夫・小久保謙一・新堀豊彦)

神武・岩戸・いざなぎと続いた景気が、オイル・ニクソクシヨックで低成長経済期に入る。全国的に演能が盛んになり自治体や社寺での薪能がブームとなる。第1回以降つづいた日数能は第29回で終え、原則一日の演能となる。第26回より会場を青年センターへ移す。第41〜60回 少子高齢化多様

社会(会長：新堀豊彦・藤本圭佑)

平成景気の後バブルが崩壊し景気低迷が続く。平成8年、能楽謡曲愛好者多年の悲願であった「横浜能楽堂」が完成、横浜芸術文化振興財団が経営主体となる。「横浜能」は第50回を区切り、一日・能一番、狂言一番となる。能は観世・宝生・金春・金剛・喜多・梅若の順とし、出来るだけ地元ゆかりの能楽師の出演機会を設ける。そして第60回「横浜能」は能「邯鄲」(金春流) 狂言「末広」(大蔵流) を始め各流派による素謡、仕舞など豪華な彩の特別番組が予定されている。

これからも横浜能楽連盟は、世界の無形文化遺産となった日本の古典芸能「能楽」を、過去から未来へつなげる活動に地道に取り組みたいと考えている。おわりに「横浜能」をご支援していただいた横浜市当局はもとより、能楽愛好者そして多くの市民の皆様のご理解とご協力に深甚なる謝意を表します。

連盟報告(平成23年度後期)

企画事業担当 鈴木 力雄

1、役員会の開催
23年度は役員会を5回開催した。主な討議事項は、役員改選

を迎える24年度総会の準備、主催事業の開催案内、結果報告などのほか、昨年度の改選で会計担当理事が交代したことによる金融機関への手続き完了に伴う規約の改定などである。

なお24年度総会は、平成24年4月23日午後2時から横浜能楽堂2階レストランで開催する。

2、横浜能楽連盟の「主催事業」
(1) 第60回「横浜能」

平成24年6月2日(土)に開催、60回記念大会として、能 金春流「邯鄲」の他、各流派の能楽師による素謡などの演出が決まった。(詳細については、能楽だよりを参照)。

なお、平成23年6月4日開催した第59回「横浜能」は、既報(幽玄第42号)の通りである。

(2) 第27回「横浜五流能楽大会」(当番幹事 金剛流)

平成23年10月1日(土)横浜能楽堂で開催した。出演者数は40番、出演者は延358名、演目別は素謡15、仕舞11、連吟11、独鼓3であった。なお今回の演能時間は、予定より23分超過して終了した。舞台への出入り、見台受け渡しに手間取ったことなどによるものなので、出演者の円滑な進行について、今後さらなるご協力を願います。

(3) 第15回「五流交流のつどい」(当番幹事 宝生流)

平成24年2月18日(土)横浜能

楽堂で開催。

出演者数の演目別は、素謡15、連吟6、独吟1、独鼓2、仕舞10の34番であった。

(4) その他
前記「大会、つどい」で履物の取り違えが依然としてなくならないので、履物の着脱に際し誤りの無いよう、各自自己管理の徹底をお願いする。

また能楽堂のスリッパが足りない、第2舞台へ行くときなど足袋で土間を歩き、そのまま舞台上がることが見受けられる。このようなことのないようマイスリッパの持参をお願いする。

第27回横浜五流能楽大会

金剛流 倉藤 睦子

平成23年10月1日(土)、秋晴れに恵まれた日に開催されました。例年9月の第3土曜日に開催されていましたが、この日程は当番流派金剛流の定例会と重なるため、また「横浜能」が春の開催になったという事もあって、この日の開催となりました。広報を見ての問合せが数件あり、横浜でこのような会が持たれていることに関心を持たれ、見学を約束されたことは嬉しいことでした。

この日の出し物は素謡15番(出演者219名)、仕舞11番(

出演者36名)、連吟11番(出演者97名)、独鼓3番(出演者は6名)の計40番、出演者は延358名でした。

第21回から行われている五流競演は、連吟「土蜘蛛(土蜘蛛)」。演題標記が流派によって異なることに関心が持たれました。また、強吟のため各流派の違いはそれほどないのでは…と思われるていましたが、それぞれ特徴があり、興味深いものになりました。各流派の熱演により、当番幹事の思惑より多少時間がかかってしまいました。事前にどのくらい時間かかるかをリサーチする必要があったと思われま

第14回「五流交流のつどい」開催当番流派・喜多流が会開催の運営記録の電子データ化、運営報の継承を提案され、これを実行しました。

「めぐり」作成は先の曲に30枚を新調し65枚(段もの3曲を含め48曲、その他)となり、ますます充実してきました。今回は館内掲示物をパウチ加工し、毎回使えるよう「めぐり」と共に保管するようにしました。他にもデータ化されたことよっていろいろな作業に無駄がなくなつたように思われます。

上げます。

テイカカズラ

観世流 鈴木 幸江

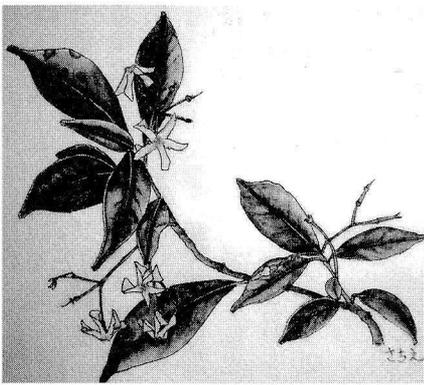
「キョウチクトウ科 テイカカズラ 常緑のつる性植物、気根を出して他物に巻きつき上昇する。花は白色のちに黄変し、弁は巴状をなす。」手元の保育社「標準原色図鑑全集8樹木」ではテイカカズラをこう解説しています。初夏の頃、軽やかに咲く小さなかざぐるまのような形の花は印象的です。植物観察会でこれがテイカカズラですと教わった時は、ああ、これが謡曲「定家」に謡われている植物かとうれしく得心しました。

昔、中学・高校時代に教わった藤原定家は藤原俊成の二男、平安末から鎌倉時代の公家・歌人、「新古今集」「小倉百人一首」の選者という固苦しくも立派な人物でした。ところが、謡曲「定家」はだいぶ様子がちがいます。定家と式子内親王(後白河院の娘、歌人)とは秘かな恋愛関係にあり、若くして亡くなった式子内親王の御墓に定家の執心が篤となって這い纏い、互の苦しみ離れやらずと謡われています。

都に上つた旅の僧が、にわか雨に会い、雨宿りに立寄つた所が定家ゆかりの「時雨の亭」でした。どこからか立ち現れた女

性が葛葛が這い纏い形も見えないような墓に案内し、「これは式子内親王のお墓です。又この葛は定家葛と申しますと誇り定家の妄執にまわりつかれる苦しみから救ってくださいと旅の僧に頼みます。男性に愛されることより、仏道なって成仏するという、精神的に一段階上の世界を目指したいという女性の強い意志に新鮮な驚きを感じます。謡曲に登場する女性は、古い時代の物語とは思えない程芯の通つた自己主張をしていることが多いように思います。

さて、テイカカズラですが、フェンスにからめて垣根にする程、繁茂力の強さは相当なものです。覆いつくされる息苦しさを表わすには実に適切な植物を選んだものと感心してしまいます。昨年九番習にチャレンジしています。「定家」を教えてください。式子内親王の心の動きに、きつと新しい発見



があるものと、今から楽しみにしております。

「葵上」体験記

観世流梅若会 木部清美

12年程前でしたでしょうか堀内先生演じる「紅葉狩」を拝見した時、女性でも能を演じることが出来ることを初めて知ると同時に、女性の謡声も耳に優しく良いものだとても感動いたしました。そして、堀内先生のご長女、久子さんと同級生ということもあり、早速弟子入りをして現在に至りますが、昨年10月、横浜能楽堂におきまして「葵上」を演じるお許しを頂きました。時期尚早かとは思いましたが、年齢的なことも考え、この機会にと取って挑戦させていただきました。

最初にこの演能の話を、日頃日本舞踊の関係でお世話になっている先生(もと観世流で書生経験後、現在日本舞踊界で演出家として活躍)にお話したところ「強吟も弱吟も解らないのに。決して長袴を穿かせてくれなどと言うのではありませんよ。お能をすること自体が厚かましいのだから。」と釘を刺されました。実際のところ謡の方は勉強不足で、強吟・弱吟はもとより拍子合・拍子不合もわからない状態でしたので、犬と散歩の時、車の運転中等、先生から頂いたテ

ープを聞いて、全てメロディーで覚えるより他に手立てはありませんでした。長左衛門先生から「謡に華がない」「謡が雑だ」とご注意を受けても、どうしてよいか皆目見当がつかず、その度に堀内先生に謡っていた、だきテープに録音させていただきました。そしてもつと謡の勉強をしておくべきであったと心底後悔しました。

面をつけたことは以前「吉野天人」天人揃の際に一度、経験をしておりましたが、とにかく点で見るような視界に、メニエール病になったかと思えるほどフラフラして歩行困難に陥り、特に下方が見えないという不安からどうしても顔を動かす結果を招き、長左衛門先生から何度もご注意を受けました。「上つ方は頭を動かしません」「六条御息所はそんな下品な事はしません。」「その面の切り方は安達原の鬼婆です。」等々。

注意力所を最後のお稽古まで大学ノートに記載していったところ、1年間でちょうど1冊になりました。そして「日本舞踊の身体的動きが全く感じられなかったのはよほどお稽古を積まれたのでしうね。」という感想を頂いたことは私にとって最大の賛辞であり、1年以上をかけての稽古期間中に学ばせて頂いた事は、人生の上でも貴重な経験となりました。

師と横浜に感謝

宝生流 竹下宏之

「名前を貸してくれ」「何？」「明治生まれの娯楽部が潰れそうなんだ」「わかった、いいよ」。

大学時代、進級に必要な講義と必須なゼミのみ出席し、家業の小さな出版業と書籍販売を手伝っていた私に友人が声を掛けて来たのが、今から50年近く前。これが宝生流との出会いでした。正直、あまり関心もなく、名みの部員の私が、稽古にかよい始めるのには何故か時間はかからなかったと記憶しています。ただ、反省会と称する飲み会が楽しかったのは今と同様です。その頃、私共を指導して下さった方は、当時40代の三川泉師と、わんや書店に在籍され嘱託会会長も務められた佐藤芳彦師のお二人。著名な方とは知る由もない無礼な学生であった私は、教授料をお支払いした記憶もなく、「社会人になり余裕が出来たら又いらつしやい」という言葉に甘え、そのまま卒業。家業は兄に任せ、某企業に就職。30代半ばになり、ようやく泉師宅へ行くようになったのも束の間、勤務の關係で、時々日本に戻っては来たものの、メキシコ、スペイン、英、米と4ヶ国に通算して11年強滞在、ようやく横浜に戻れたのは49歳の時でした。それもしばらくは仕事の關係で

なかなか余裕が生まれず、稽古に通うのがやつの身という落ちこぼれともいえる私を、師は再び受け入れて下さり、爾來、今日に至っております。

今再び、謡と仕舞を楽しめているもう一つの要因は、横浜に戻れたことが大きかったと思います。月3回ほど、同好会の集まりで、横浜能楽堂に通っています。この能楽堂は、戦災を免れた染井能楽堂がその後解体され、前述の佐藤芳彦師も関係して宝生会に保存されていたものが、横浜の能楽愛好家の諸先輩のご努力と行政・地元企業の支援等々により復元された、由緒ある宝物と知りました。横浜は明治以降の絹産業の興隆と相俟って、経済界・官界、文化人の方々の間に能文化が栄えたといわれている土地柄で、他地域と比しても、五流派共健在で、伝統文化を継承し得る環境が整っていると思います。師に恵まれてきたことに加え、私達も使える能楽堂、それに、識見を備えた多くの能楽愛好家に接する機会の豊かさに、幸せを肌で感じています。

冒頭に記した通り、宝生流との出会いはたまたまで、遠回りや空白も長かった私が、今こうしてのめり込んでいる姿を、会社時代の友人・後輩達は不思議そうに眺めています。感謝！

遊行上人太空の博愛

金春流 飯島端治

(1) 太空の遊行

謡曲『実盛』にワキとして登場する遊行上人は、遊行一四代の太空（たいくう。一三七五〜一四三九）という人です。太空は、遊行六年を経て、応永二四年（一四一七）、時宗総本山遊行寺（遊行寺は通称、正式には清浄光寺）の住職である藤沢上人（八代）となりました。

諸国を廻って布教活動を行なう「遊行」は、開祖一遍以来の伝統で、総本山遊行寺住職の地位を継承する人に課せられる責務となっていました。太空の場合、北陸・山陰地方などを廻国したと言われます。

謡曲『実盛』は応永二二年（一四一四）二月、遊行中の太空が加賀（石川県）篠原の実盛塚を詣でて、斎藤実盛の霊を供養したという史実に基づき、さらに『平家物語』巻七の「実盛最期」の章を典拠に作曲されたものです。

(2) 実盛の供養

遊行寺拝観の契によると、実盛の霊の供養は「薄念仏」（すきねんぶつ）によつて行なわれたと言います。これは開祖一遍も行なっているようですが、薄の葉を卒塔婆に見立て、「南無阿弥陀仏」の六字名号を記し墓前に供えたと言われます。

『大日本地名辞書』（吉田東伍著）には、「篠原新村の辺に実盛の古墳あり」として、その時の事が、次のように記されています。

実盛の塚標の石に、南無阿弥陀仏、極悪重人、無他方便、唯称弥陀、得生極楽「六道の苦患を救ふ此六字唱へてくれよ、参る人々」と刻み、又応永二二年二月遊行一四代太空上人、実盛公の幽魂を化導云々と刻む。此遊行僧の化導の事は、謡曲実盛に伝へたれば、近代殊に世にもてはやされぬ。

塚を訪れる人々に、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天、六つの冥界）の苦悩を救うこの六字（南無阿弥陀仏）を唱えてくれよ、と呼びかける遊行上人太空の言葉に、老いを隠すため髪を染めて戦場に臨み、ここ篠原の地で手塚光盛と戦い最期を遂げた斎藤実盛に対する、深い慈悲の情が感じ取れます。（長文につき、以下は次号に掲載）

謡習い始め

喜多流 長塚正敏

会社を早期退職し、第2の職場で働き始めて、10数年余が過ぎました。現在もそうですが、現役の時は仕事の關係上不定期な休暇の為に、習い事に定期的に通う事ができませんでした。それ故に退職したら1日置き位

に色々な習い事に通うことができていたのでとと思って楽しみにしていました。

ところが、第2の仕事も忙しく、なかなか趣味を始める事ができません。4年ほど経ち仕事に慣れてきた頃に、謡を近くで習っている人たちがいるという話を聞き、お願いして現在の会を紹介してもらいました。無謀にも、能楽には五流ある事も知らずに入会させてもらい、それ以来何年も経ちますが、なまけ者の性分でなかなか上達せず、まだまだ同会員の皆さんのレベルに到達するには時間がかかりそうです。でも年に数回の発表会があるのが非常に励みになります。初舞台では能楽堂の雰囲気にも馴染みましたが、皆で声を出し始めてからはそのことに集中し、何とか終える事ができました。発表会があることで稽古に張りがでるし、動機づけにもなります。今もそうですが、悪声で、また声量もありません。しかし「初めから声の良い人に限って伸びない。声の悪い人こそかえって、稽古によって、本当の謡い声になるものだ。」とのおだてや励ましに乗って、めげずに楽しく稽古を続けています。事実7、8年通っているスナックの店で（比べるのも憚られますが）カラオケが前より大分ましになったと言われ、謡の効用だと自己満足しています。

京都が好きで年に1、2回行きます。或る年、休暇が丁度桜の時期と重なったので、2ヶ月前に宿を予約して行きました。横浜ではほころび始めたので京都は大分咲いているのではと期待したが、全く咲いておらず、タクシーの運転手さんにわざわざ咲いていない所に来るとはと笑われました。花見の時期は夕イミングが難しくいつも苦勞しています。

2年程前に晩秋の三井寺を訪れることができました。丁度「三井寺」の稽古が終ったところで、「形の平等院、銘の神護寺音の三井寺」として日本三銘鐘とある通り、早速鐘を撞かせてもらい、散り残った紅葉や近江の遠景を眺めながら、舞台の情景を想像することが出来ました。これからも年に一度は訪れたい京都、次は何処に行くか考えている時に、テーマを持って色々な場所を訪れたら良いと言われて、インターネット等で先輩方の資料を参考にしながら、謡躰めぐりに積極的に行きたいと思っ

舞囃子へのいざない
金剛流 大嶋一晃

昨年のNHK大河ドラマ「江姫たちの戦国」のオープニングは、桃紅色の背景に江姫が宙に

舞う情景で、「舞の金剛」に属する流友の一員として大変光栄に思っています。さて、定年後の趣味に「謡曲」

はどうかと思つて入りました私の様な素人は、先ず「謡」から習いますが、和文の美的・感情的表現に魅せられ、次に「曲」の強弱・音階・拍子・緩急・音色との格闘が始まります。この「謡曲」に役立つとこのことで勧められました「仕舞」でしたが、単に曲に合わせて手足を動かすのではなく、型の保持、大小、緩急、静止等の動きに加え、無表情の顔に角度と視線の変化をつけることにより、神・武将・女性・母親・僧侶等々の役柄を汲み取った動きの雰囲気表現するとなりますと、これは至難の業で、とりあえずマイペースで行っています。

これら「謡曲と仕舞」だけでもかなり奥行きが深くて、先は如何辺かと思えますと、やはり究極の処は「能」に繋がるのでしよう。我々素人が「演能」を経験するのは大変なことですが、「謡曲と仕舞」に囃子方が参加された「舞囃子」があります。囃子と西洋音楽のオーケストラと違うのは、楽器だけの演奏はあまり無く、囃子方はむしろ謡や仕舞を導く指揮者の役が重要な要素であると思えます。

特に「能」の世界では、囃子方の合の手と緩急の鼓音にある、「凛とした静粛の一瞬」が演出効果を高めていると思えます。緩急と静寂の「間」の中に物語の喜怒哀楽を封じ込めていくのが正に幽玄の世界であり、「能」の芸術だと思われ、観客はその「間」から、人それぞれ感性・経験に基づいた感情を汲み取るのではないのでしょうか。



この緩急と静粛の「間」を司るのが、大鼓、小鼓であり、笛・太鼓の「囃子方」であると思えます。「舞囃子」を経験することが「謡曲と仕舞」に、静粛の「間」を取り入れて、一味違ったより一層深いものに導いてくれると信じています。

能楽堂だより

二十四年五月以降の公演

二十四年度、五、八月の横浜能楽堂の公演予定は、次の通りです。このほか毎月第二日曜日に「横浜能楽堂普及公演」横浜「狂言」を開催いたします。

第六十回横浜能
六月二日(土) 午後一時開演
素謡「翁」(喜多流) 出雲康雅
仕舞「三笑」(観世流) 観世恭秀
田邊哲久 岡本房雄

一調「笠之段」(観世流) 梅若紀彰
柿原崇志
独吟「熊野」(金剛流) 豊嶋三千春
舞囃子「融」(宝生流) 大坪喜美雄
狂言「末広」(大蔵流) 山本東次郎
能「邯鄲」(金春流) 金春安明
チケット発売日

三月三十一日(土) 正午から
(初日は電話・webのみ)
S席八千円/A席七千円/
B席六千円

普及公演
「夏休みワンダーランド」
七月二十九日(日) 午後二時開演
狂言「柿山伏」(大蔵流) 山本則重
能「羽衣和合え舞」(観世流)

武田文志

チケット発売日

五月十二日(土) 正午から

(初日は電話・webのみ)

おとな/S席四千元/
A席三千五百円/B席三千元

子ども/千五百円

保護者は子どもと同数まで、

千円引(ご希望の方は電話か

窓口にてお申込み下さい)

※お子様のお席をお求めにな

らない場合は適用されません。

こどもは18歳以下が対象です。

「体験しよう」：午前十時半か

ら：チケット(子ども)ご購入

入の方対象

能・狂言の動きや能の楽器が

体験できます。

定員：80名(電話か窓口にて

お申込み下さい。先着順)

※親子でご来場ください。

《編集後記》

横浜能は昭和28年11月の第1回から今年6月2日の公演で第60回となり、還暦を迎えることになった。これも偏に皆様に支えられ継続されて来たお陰と考えている。記念行事として、金春流の能、大蔵流の狂言を始め、各流派の能楽師による素謡・舞囃子など多彩な催しが行われる。多数の御来場をお待ちしています。

R・K記